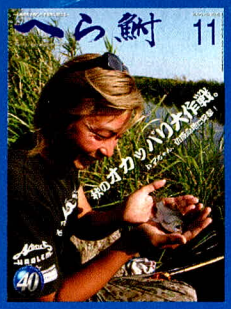


●今月の表紙●
angler：都祭義晃
field：ジャコ川
photo：本誌・里
layout：本誌・里

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻

No.479
Nov 2005
11

釣り場割引クーポン券
野田幸手園　椎の木湖　清遊湖　谷和原大沼
隼人大池　上尾園　F.A吉羽園　谷養魚場
将監　柳生FP　筑波白水湖　泉堰　逆井HC
友部湯崎湖　水藻FC　甲南へらの池
三和新池　狭山HC　新座LC　川越FC
府中HC　当麻池　多賀釣池　芦田湖水光園
鳥羽井沼　朝日池　大上へら池　田島池
霧の沼　清川つくしF.C　小川つり堀園
三名湖・舟宿 光月　千代田湖・舟宿 千和
西湖・釣舟 白根　西湖・釣り宿 丸美
西湖・釣り宿 青木ヶ原　165ページ～

12　特集　秋のオカッパリ大作戦。
トマちゃん、佐原向地に突撃！

146　田辺哲男の「それってどーゆーことよ!?」最終回スペシャル
《Vol.33》無謀!? それとも勝利確信!?
シマノジャパンカップ関東予選ダブルエントリー!!

COLOR（カラー）

21　NEO-HERA 2005　【第四戦　亀山湖】

26　名手・石井旭舟がいく、へら鮒出会い旅…　へらぶな浪漫街道
《第三十四回》岐阜県・伊自良湖

34　小池忠教 激釣大全
《第八回》筑波湖

40　杉山達也のSPLASH BEAT Ⅲ
《Vol.17》ペレ底猛進!!　富里乃堰

46　伊藤さとし　秋の管理池を「将鱗® へらトーナメントステージ」で、繊細かつ豪快に釣る！

49　棚網 久　あなたの夢を叶えます。
「ズバリ、トーナメントで優勝！」　その1
ドリーマー：本郷友康さん　釣り場：野田幸手園

★AREA　REPORT
58,66　間瀬湖（埼玉県）　本誌・伊藤洋一
60,68　茨戸川（北海道）　北林正行
61,69　和気の池（石川県）　山本一朗
62,70　伊自良湖（岐阜県）　後藤 誠
63,71　白川ダム（奈良県）　前田誠志
64,72　吉野池&和田中湖（福岡県）　河口正伸

134　〈特別企画〉まずは使ってみようよ！　竹竿入門

136　竹とともに生きる。
《第27回》廣茂　石井茂夫

139　戸張 誠　野釣り道場
《第十八回》【三島湖・鳥小屋R】

145　南 元彦　42.5cmの琵琶湖べら、見参!!

152　吉川ひとみの「へらってヤバイわっ!!」
《Vol.40》聖なる気持ちで…。秋満載の聖湖！

156　稲毛師匠と編集部諸が行く、ODEKO（オデコ）危険度120%
《第11回》利根川・大正橋上流（群馬県北群馬郡子持村）

160　生徒緊急募集!!　2006年1月号より新企画「ガチンコ道場」

194　岡田 清　Deep Side Angle
《Vol.25》【ペレ宙修得への挑戦Ⅲ】　F.A吉羽園（埼玉県）

200　釣りの帰りに寄りたいお店
《file.14》野田幸手園近く【そば処 峰舟】の天ざる

203　北川穂積の全国野釣り行脚
《第10回》鍔市ダム（兵庫県）

206　釣果予想クイズ

208　フィッシングレディ
《今月のレディ》石塚絵美さん　柳生FP（群馬県）

MONOCHROME（モノクロ）

73　へら鮒専門店 かわせみに 至連、世志彦来たる!!

74　へら鮒釣り　超基本講座
《第11回》浅ダナウドンセットの超基本

83　あらいしのぶの なぜなぜ しのちゃん
《第11回》「しのちゃん、野べらを求めてどこまでも…」
釣り場・小貝川&野池（茨城県下館市周辺）

88　NHCスピリット
《Vol.23》JBへらぶなトーナメント第4戦　羽生吉沼

92　トーナメンター小林恭之が挑む！　竿頭までぶっ飛ばせ!!
《Vol.23》「野田幸手園」サンデー51クラブ月例会

99　江成公隆のトーナメンター、復活への道。
《Vol.41》「独習のシャア」in野田幸手園

106　そんなモジリにダマされて…　天野正由
《その23》夢追釣人（四万湖、薗原ダム～相模川）

110　水辺のプラネタリウム　吉本亜土
《今月の星空》「アゲハモドキ」

115　どやさー 今月の釣り場　西田美明
《その11》つつじ池　「巨べらかアルミホイールか」

118　最狂へラ戦士養成所"鮒の穴"　漢（オトコ）タカハシ
《第三十二話》【海外遠征SP。幻の蒼い巨大手長エビを釣り上げろ!! in 台湾】前編

122　母なる湖… 琵琶湖べらを釣れ！　南 元彦
《第7回》西ノ湖で再チャレンジや～！

126　野田幸手園新聞

162　ワクワク管理釣り場情報

171　小売店情報

★へら鮒BOX
177　里ちゃんの新米編集長雑記
178　情報発信基地
180　ボイス
186　コラム『へら狂おやじと呼ばないで』　白石和弘
187　コラム『日研だより』　日研広報部長・遠藤克己
188　コラム『日々是、勉強!』　ホワイト
189　コラム『紀州"想いの竹"のものがたり』　中峯伸行
190　プレゼント発表
191　広告索引
192　編集後記

STAFF

●Producer
根本百合子

●Editor in chief
田中里史

●Editor
大場勝良
諸冨一秋
伊藤小百合
伊藤洋一

●Planner
〈オフィス・えふ〉
藤原　肇

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆のトーナメンター、復活への道。

〈Vol.41〉

独習のシャア in 野田幸手園

「一歩進んで二歩下がる!?」

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka

業界初、Web連動企画！…のハズが更新停滞中！ 《URL》http://hesar.yokohamatsurumi.net

珍獣バラウドン？

9月11日(日)、僕は野田幸手園にいた。

無理矢理カメラをお願いした佐藤 誠ファミリーに便乗しての取材にもかかわらず、寝坊した僕のせいでエサ打ち開始は7時半をまわってしまっていた。駐車場も溢れる寸前で何とか滑りこめたほどの大盛況だったが、フィッシングプレッシャーは何処へやら。池の状態はすこぶる良く、9尺メーター両ダンゴでエサ打ちを開始後、10投で8枚という激活性。それから10枚目を釣るまでにはお約束のボケをかまし10分以上はかかったが、「ダンゴで問題なく釣れている」状況の確認としては申し分ないスタートだった。

今回の僕のテーマはダンゴがシブってからのバラウドンではなく、「ダンゴでイケてる状態でのバラウドン」であった。なぜなら、ダンゴにアタリ切っている中で下バリのウドンを食わせることが、暖季の固形セットの核心に迫ることになると確信していたからだ。

両ダンゴで何のストレスもなく釣れてくる状態で、果たしてセットは成立するのか？ 何も大袈裟に構えなくとも過去のメジャートーナメントの結果を見れば、この問いに対する答えはすでに出ている。「する」のだ。上位のほとんどがダンゴを打った中、セットのスペシャリストが1、2名はしっかりと食い込んでいるというデータ。しかし、僕にはそのプロセスが全く理解出来ないでいた。過去にこの企画で僕にセットを手ほどきしてくれた先生として、岡田君とカットビ君の二人がいるが、この両人はいわゆる「無理セット」は選ばない。暖季の固形セットは手の内に入れていても、それはあくまでも食いシブってからの話。ダンゴで釣れるなら素直にダンゴを打てるだけの知識や技術、そして一番肝心な自信をすでに持ってしまっているのだ。そういう意味では、実はこの両人も「ダンゴで釣れる中のバラウドン」を理解出来ていないことになるのかもしれない。事実、僕とカットビ君との最近のメールでこんなやりとりがあった。

「椎の木でのジャパンカップ予選、セットで通過したのは天笠さんだけで、他はみんなダンゴだったそうだけど、どうなってんの？」

「こっちが知りたいヨ～」

実はもともとの取材日は台風で延期となり、振り替えが9月11日というのは急遽決まった。前日に里ちんを通じ、ダイワのディフェンディングチャンピオンである天笠 充氏に取材の同行を打診してもらったのだが、急に言われて釣りにいけるほど氏も暇ではない。仕事で断念。やはり自分で何とかするしかない。

「よーし。カットビ君が唸るような何かを見つけてやるぜ！」

僕はやる気マンマンで、ウドンの準備を急いだ。

「このクソ暑い中ウドンだってよォ…」

背中の例会組に笑われながら、バラウドンでの試行錯誤は続いた。たまに僕の竿を曲げるのは、上バリを食った時のみ…これでは本当に無理矢理セットだ。こんな中、セットで釣果を出してくる人達は、実は「無理セットではない」のではないか？ 捉え方というか発想が全く違うのではないか？ きっとそうに違いない。おそらく僕には何かが抜けているのだ。

粒戦やペレ匠顆粒を用いた粗い粒子の組み立ては、知識としてはすでに僕の頭にあった。さらに「落下中」という要素も知っていた。いくらバラケの芯に反応している状態と言えど、直近にぶら下げておいてはカラでしかないのだ。そのためにハリスを極端に詰めることはしなかった。にも関わらず、全く接点が見つからない。もう一度頭を整理する必要がありそうだ…。

封印された記憶。

両ダンゴでスタートした時の、僕のセッティングは25—32㎝。椎の木湖で行われるへらマスターズ予選のレギュレーションを意識した大きめのウキと組み合わせたため、ハリスは長めのチョイスとなっていた。やや入れ気味での釣りとなったが、あっという間にイレパク。僕はウドンセットに変更するにあたり、下バリを切り落とし、5㎝に詰めて再び結び直した。これで僕のセッティングは5—25㎝。ハリは最初から、どっちつかず？の関スレタイプ4号を上下に結んであった。ある意味、かなりいい加減ではあるが、最初のセッティングが偶然「合っていた」のなら、今度のセッティングでは追えないことになる。入れ気味で釣っていたとはいえ、時期的にも上からのへらを釣っているのは明らかだったから、「追えない＝バラケにアタら（れ）ない」ということに理屈ではなり、自動的にダンゴへのカラを回避出来る。さらに、仮に追える活性があったとしても、エサがひとつになることで持ちが悪くなり、結果として目的のタナに到達する頃にはアタるだけの芯が残っていないということにもなる。つまり、新たにバラケを作り直す必要がなく好都合なのだ。僕は全く手直ししないまま、両ダンゴのときのエサを上バリに付けて放り込んだ。

セットに変えてしばらく様子を見たが、上バリの持ち具合とへらのバラケへの反応は、ほぼ狙い通りのものとなった。サワリというかへら気を見る限り、ダンゴがひとつ減ったことによる寄せ不足の心配はなさそうだ。あとはアタリを見極め、ウドンへのヒット率を高めるヒントを見つけるだけだったのだが、想像していたほど激カラにならない。釣れるのは高い位置からのアタリで上バリを食ってくるだけで、アタリ自体が少なく、ただ単に持たないダンゴで釣っているようなウキの動きだった。

暖季、バラけるものへの反応がある程度強い時、固形物に対しては開かせようという強烈なアタックをへらがするという認識。すなわち「ぶつかり」。僕の頭からはどうしてもこのイメージが離れない。しかし、目の前で展開されているウキの動きはどうだ？ ウドンに対する反応が弱いじゃないか…。

実は10年以上前、へらの状態は全く違うが、同じようなウキの動きを見たことがある。羽生吉沼でのサンデーマスターズ例会だった。前日

試釣の結果、ダンゴではアタリにならず、トロコンでは寄せ切れず、セットしかないだろうという結論になっていた。当時の僕達は得意としていたセットだが、暖季のクワセはオカメであってウドンではなかった。すでに強烈な「ぶつかり」の存在を知っていたからである。ところが羽生は「オカメ禁止」。まだヒゲがリバイバルする1〜2年前の話で、僕達はウドンで悶絶した。それでも一番ウキが動くのがセットだったため、本番でもやるしかないと覚悟を決めたのだった。明けて例会当日。エサ打ち開始早々に、へらは見えた。ウキへのモミも十分。しかし落とさない…。前日の土曜以上に渋った羽生のへらは、間違って上バラケを食ってくれることもほとんどない。当時の僕はここで、下ハリスをおもいっきり詰めている。論拠はこうだ。

「固形物に反応しない筈がないので、ハリスがあおられて張っていないとしか考えられない」

ただのバカだった…。いくらかバラケに反応がある状態ならまだしも、ほとんど反応がない状態で「ぶつかり」は起こるのか？　全く起こらないことはないだろうが、「セットならアタリ倍増」という状態にはならないのではないか…。当然ながらアタリは増えなかったが、へらは相変わらず湧いていた。次に僕が打った手は、バラケを石のようにシメることだった。羽生はタナ規定がない。いるタナを釣れるため、追いを考慮する必要はない。さらにへらはボケ気味であり、もっとエサのそばへ近付け、タナを凝縮させる必要があると考えたのだ。これでアタリは一気に出始めた。バラケをシメ切ることによる寄り不足は心配いらなかった。ここで僕は完全に錯覚した。

「正解に近付いている！」

ところが、アタリ始めたといっても見事なまでの全カラだった。今振り返ると、本当にウドンに反応していたのか疑問である。「今度こそ」シメたバラケに対する「ぶつかり」が始まったとしか思えない。しかしこの日の僕は、「今日はダンゴにアタりっこない」という前提を忘れることが出来なかったのである。実は最終的にセッティングは2—5㎝になっていた。下ハリスの張りを極限まで確保したいと考えた結果、段差は上ハリスを詰めて作る必要があった。2㎝ならば、バラケにアタっても、十分に「固形らしい」強烈なカラツンが出る筈である。さすがに「下ハリスが短過ぎて」抵抗が大きいかもしれないと感じた僕は、たしか20㎝くらいまでは伸ばしたりもした記憶がある。張りを気にした僕はそれ以上は伸ばせなかったが、何をやっても激カラは消えなかった。が、ここが立ち直るには最後のチャンスだったのだ。

〈下ハリスを伸ばしても何も変わらず激カラのまま→変わってないのは何？→上ハリス…ならばカラツンの原因は上ハリスでは？〉

完全にヒートアップしていた僕は、ただただ強烈なカラツンに強烈なアワセをくれることしか出来なかった。恥ずかしい話だが納竿までに僕は、穂先を3本折っている…。放心状態のまま例会は終了。その後、この屈辱のデータを僕は引き出しに仕舞い義昱続けてきた。そしてヒゲに出会う。

「そっか！　オカメが封じられてもヒゲという手があったのか！」

ウドンを食わせるにはどうしたら良かったのか、考え続けてきた僕の脳は停止した…。

で、長くなってしまったがいよいよ今回の幸手について。例会だった羽生とはテーマが違い、ウドンを食わせることに意味がある。「暖季のウドンは無理」という結論で終わることは許されないのだ。ただ、羽生のデータは無駄ではない。「もし同じ手を打ったら」という見方で考えてみた。羽生では先にハリスをいじったが、幸手ではちょっとした思い付きで、まずエサをシメることから手を付けてみた。「持たないダンゴで釣っているような感覚」を証明してみたくなったのである。小分けしたバラケを手直し、数投打つと結果はあっさり出た。5㎝の上ハリスでは、ナジんでから間があるものの、ポツポツとバラケを食ってくるようになったのである。下ハリスは25㎝のままだが、糸ズレはあまり気にならない。何の機能も果たしていないと等しい。これが何を意味するかと言えば、一本バリ禁止のルールのもと、ダミーのセットが成立する可能性を示している。実は上下ともに極端に短い僕のセッティングは、ちょっと離れて見ると全て上バリを食ってきたように見えるため、よく誤解された。当時の僕は、「セットにした時点でアタリが増え、釣りが複雑になる。一本バリのダンゴで釣りたいがためのダミーセットなどあり得ない。冗談じゃない！」と反論したが、下バリへの反応が少ないケースを目の当たりにしてしまった以上、そういった誤解は当然だったのかな、と感じる。裏技すぎて、たぶん釣れてもいい気分にはなれないが、ルール違反ではない。こういう釣りもアリなのかな、とも思う。セットで最近よく言われる話で、「上下のどっちを食っても構わないという感覚は、実はあまり良くない」というのがある。もちろん上バラケを食ってくればラッキーで歓迎だが、きちんと下のクワセに反応させる努力を怠ってはならないという意味だ。岡田君なんかはこのタイプ。この話に「どっちつかずのエサ合わせになってしまうため」という補足部分があったらどうか。「じゃあ、僕はバラケに食わせることに専念するよ」という釣り人が出てきてもおかしくはない。ただし、上下のエサ付けを逆にするのはどうだろう。普通のセッティングでは下ハリスへの反応が避けられない時、極端に短い上ハリスについたクワセなら、反応を格段に減らすことが出来るのではないか。やり過ぎだとは思うが、ハッキリと禁止というルールは聞いたことがない。これも「アリ」である。僕はこの点についても度々誤解されていたようだが、実験でやったことはあっても、競技会では一度もやっていないので念のため。

下らないことを考えないようにするためには、訳の分からないルールを改正することだ。「ルールは破るためにある」という言葉があるが、破らないまでもすり抜ける輩が出てくるのは「ルールがあるからこそ」。スレ取り以外は何でもアリアリのフルオープンにすれば済む。一本バリに対する「そんなの釣りじゃないよネ」というような不名誉な評価はなくなるし、もしかすると「上下逆セット」にも画期的な効果が見い出されるかもしれない。

新発売された話題のカーボンロッド「宮本武蔵」
威風堂々の黒光り。宮本武蔵の金文字がキラリと光る。男のダンディズムと渋さが際立つ外見だ。「振り込みやすさ抜群」「かけ味がいい」「軽い！一日振っても疲れない」など新発売早々、幅広い支持を受けている
左端の金額はあなたがブランド名にこだわるなら余計に使うお金もしこだわらなければ得して残るお金だ。将来に不安が大きいこのご時世にこの差はありがたい。
今なら、発売記念特別価格でなんと尺単価980円！
しかも、3本以上まとめて購入すれば、なんと8尺が1本無料プレゼントされる特典付き！（数量限定お早めに）
その上、送料無料、安心の代金後払い返品自由も良心的だ。
さて中硬「宮本武蔵」。
無料資料請求はカンタン
今すぐ、通話料無料24時間録音テープに住所、氏名、電話番号を残すだけいまなら、資料請求者には、釣り場で重宝するタオルが無料で進呈される。ただし、先着58名限定なので
今すぐ
0120・76・2538
日本テックラボ
得
十六万六千円も損をしたくないと考えても無理はありません

★取材協力=野田幸手園（詳細は本誌126ページ「野田幸手園新聞」をご覧下さいね！）

ステルス。

いよいよ下ハリスを詰めるという行為についてだが、この日の僕はさすがに詰められなかった。なぜなら10年前と違い、「程度にもよるが、仕掛けがたるんでいてもアタリは結構出るもんだ」という認識が、現在の僕にはあるからだ。これは「底釣りゼミ2005」に書いた。さらに今回使用したウドンはかなり重たい部類に入るものを使用していた。激活性の中、ある程度のハリスの長さが必要になると想定していたからである。ハリス長を決める際、拡散範囲と距離を合わせるだけで釣れるほど、現在のセットは甘くないのだ。…ちょっと待った。そこまで分析出来ておきながら、なぜ今回の下ハリスが25㎝なのだ？　10年前の最長時と5㎝しか変わっていないじゃないか…。

実験のため、思いきって倍の50㎝まで一気に下ハリスを伸ばしてみた。バラケは食わせようとする前のエサ。つまり弱々しい動きしか出ていなかったバラケである。この組み合わせに変えてしばらくすると、驚いたことに固形らしい見事なアタリが出始め、僕はついにセットの入り口に立ったと直感。そして本当に、ポツリポツリと下バリをくわえて上がってくるようになったのである。

ハリスを詰めるとアンテナの役割を損なう。何も動かなければ伸ばせるが、直近のへらが反応する時には遠巻きのへらを見失う。ウキを見ているだけでは、見つかるはずのない接点…。「江成君はハリスを詰め過ぎ」

北城氏をはじめ先輩方によく怒られたことは、今までさんざん書いてきた。仕掛けには遊びが必要なのだ。

バラケの組み立てはまだほとんどいじっていないにも関わらずの、釣況の劇的な変化。では、ハリスを伸ばして何が変わったのか？　それは「ステージ」に他ならない。事実、ウドンを食ってくるへらは皆デカかったのだ。明らかに別次元に到達したと確信した。…忘れていたが、これは8月号の「脳内セット」ですでに結論が出ていたことだった。引用しておこう。

「ダンゴのやや遠巻きに大型がいるという構図は、うまくやればセットで型が揃う可能性…」

今回のように型に大きな差があれば、ダンゴで十分釣れているのにセットにするメリットはある。が、僕はきっと選択しない…。ただ、かったるさを感じつつもダンゴを引っ張るということは、少しずつ無くなっていくとは思うのだ。

セットでウドンを食わせるヒントはつかんだ。とはいっても、完全にバラケへの反応を防ぐことは、僕の知る範囲では不可能だ。ステージ（有効ゾーン）を変え、ウドンに反応する遠巻きのへらに下バリを届けて、直近のへらを相手にしないつもりでいても、バラケへの反応は回避出来ない。長い下ハリスに対する糸ズレだってある。固形らしいアタリに的を絞ればいいという気もするが、複雑な動きになりやすいのは否めない。

バラケへの反応回避策として、「へらが嫌うタッチにする」というセオリー？はかなり昔からあったが、僕は少々疑問というか引っ掛かる表現だと感じていた。

バラケを嫌ったからといって、クワセに目を向ける保証はどこにもない。だいいち「食う・食わない」「アタる・アタらない」に関わらず、へらが興味を示して寄ってくるエサでなければ根本的なバラケの意味を成さない。これには春夏秋冬分け隔てはない。好意的に解釈すれば、「アタり切れないややボケ」の状態を故意に作り出すということになる。アタリを絞りたいがため、セットというとすぐにバラケを抜きたくなる人が多いように、さきほど書いた「持っていないダンゴのようで動きが弱い」ような状態が代表例となる。問題は「ウワズリ」。タナの崩壊とカラツン対策の折り合いを付けるのが難しい。だからセットはダンゴへの反応が鈍い寒季や、暖季でもシブってからの釣りという認識が一般的なのだ。冬はセットが「いい」のでも、「ウドンを追いはじめる」のでもない。粒子へのへらの反応度合い*に応じた釣り方の変化でしかないのだ。

＊補足＊　待って待ってのアタリで上バリを食って上がってくるとガックリくるが、実際にそういうことは少なくない。空バリを食ってきた可能性もないわけではないが、ハリのフトコロに残った僅かなエサの芯というかカスを食ってきたケースの方が多いと思う。

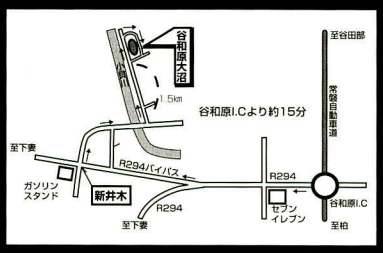
〈目の前でバラけていくエサは、待っていればハリから離れたところで食うことが可能〉

へらにしてみれば、リスクをおかす必要はないのだ。例えばダンゴでちょっとでもシブればバラけないエサの方がいいことが多いのは、へらをダンゴへ近付けたいという意味であり、やる気はイマイチだけれど「やっぱりバラけてないとネ！」という気まぐれなへらならば、「ぶつかり」を逆利用して食わせてしまおうということである。もっとシブれば、その先は距離と粒子を考えたセットへと通じる話で、「色んなエサがあるが、最後はバラけてしまうエサ」を使って釣りを組み立てる以上、へらの補食行動を考える時には根幹を成す大事な視点である。逆に、競い食いしている状況でもないのに、バラけはじめてから間があってもダンゴで釣れる時があるが、ちょっと考えてみて欲しい。実はかなり厄介である。「バラけるエサを使う」からこその駆け引きが全く通じないからだ。もちろん、そういうアタリで問題なく釣れ続くなら構わないが、終わってしまった時に次に打つ手を見つけにくいのだ。こんな状態を、「それだけバラけるものに興味を示しているということだ」と解釈したとする。確かにそうなのかもしれないが、「ではなぜ、もっと早い段階でアタらないのか」という疑問が生じる。「バラけはじめより、途中の方がバラけ方が激しいからよりアピールする」のか？　もしそうならば、最初からもっとアマいエサを打てば済むが、大抵はアタリが飛んでしまうケースの方が多いだろう。では、「エサが小さくなってからの方が食いやすい」のか？　小エサにすれば釣れるなら最初から小さくすればいいが、やはりそんな単純な話で終わらないケースが多いから困る。小さい方がいいのなら、離れていればいくらでも粒子を食える。芯を食う必要はないのだ。つま

大小、様々なへらがぎっしり！　カッツケから底釣りまで、思う存分腕を磨いてください!!

アタる！　釣れる！

谷和原大沼



●入場料　1日2000円　半日1500円
女性・中学生以下　1500円

●営業時間
4～9月　平　日　6:00～16:30
土日祝日　5:30～16:00
10～3月　平　日　6:30～16:00
土日祝日　6:30～15:30

●規　定　竿7～18尺　タナ・エサ自由
（生きエサ・一本バリ禁止）

〒300-2400　茨城県筑波郡谷和原村根新田228
☎0297-52-2763

大型新べらの強引を味わいに、ぜひお越しください!!

り「シブい」ということになる。シブいへらに対しては、「開きを抑えたエサ」での「一発取り」がセオリーじゃないか…。こういう状況は、僕はへらの「薄さ」と「素直さ」が両立した場合に起こりやすいと考えている。おそらくこんな時は、すぐそばに固形のクワセをぶら下げておいても何の反応もないことが多い。エサ合わせというへらとの駆け引きは、へらの学習度合がある程度のレベルに達していることが前提なのだ。

禁断の両ウドン。

ダンゴでアタリっきりの状況で試してみたいことが、ウドンセット以外にもうひとつあった。両ウドンである。上下同じエサであるため、組み立てはシンプルになる。前の二項のような心配はいらない（字数の関係もあるのでここでは詳しく触れないが、興味のある人は僕のHPに以前書いた関連記事があるので読んでみて欲しい）。僕は今まで、ダンゴへの反応が中途半端な時に有効なメソッドだと理解してきた。秋のメジャートーナメントシーズンで注目の的になるのは、ちょうど時期的にセットへの移行期になるからだ、と。しかし今回試した結果、「セットに移行する前に、両ウドンを試すべき」と思えてしまうくらい決まった。意外だったが、考えてみれば両ウドンのネックである寄せパワーをあまり意識しなくていいという意味では、ダンゴのシーズンはドンピシャなのだ。ただこれではせっかくセットのメカを学ぶチャンスを捨てることになってしまう。いや、もちろん両ウドンが勉強にならないわけではない。「脳味噌をスカスカにする悪しき釣り方」というレッテルを貼り、禁じ手にしている人達も一部にいるようだが、全く馬鹿げている。たしかに今回、僕の知っている乏しい知識で10年ぶりにかました両ウドンでも釣れてしまったが、もっと上を目指すためのノウハウがある筈なのだ。

興味深いデータを記しておく。両ウドンでのハリスセッティングは30—37㎝だった。釣れてきたのは、50㎝の下バリに付いたウドンを食ってくれたデカべらではなく、ダンゴの時のサイズが揃った。セットのウドンでは反応してくれなかった「ダンゴべら」が、両ウドンでは見事に食ってくれたと解釈していいのかどうか、水中のことは誰にも分からないが、マブシ粉と組み合わせることにより「開きを伴った固形」となったウドンは、セットというよりもはやダンゴに近い。それも、水中を粒子で汚さない究極の両ダンゴだ。

「へらニュース」の取材で偶然幸手に来ていた岡田君の前で、僕はリャンコ。二人は目を合わせて苦笑し、ここで僕はペレ宙に変えた。

レギュレーション。

現在はどうなっているのか分からないが、僕が在籍していた当時、ゴールデンクラブにはウキの規定があった。入会したての頃は、タナ自由の池では全長15㎝、メーター規定の池ではボディ15㎝以上（全長の規定はなし）というものだった。さらに足は4㎝以内と細かく規定されていた。ここでボディとは純粋な身の部分（羽根やカヤなどの部分）と足を組み合わせたものを指すので、身の部分で11㎝以上ということになる。これだけでも浅いタナのスレたへらを釣るにはかなり厳しい条件だと感じると思うが、実はハリス長にも40㎝以内という制限があった。アタリもトップにかかってからしかアワせてはならないので、肩で受けっぱなしのアゲツン取りやナナメ立ちでイタダキというのは全てアウトであった。目的は紙一重のギリギリの釣りを封じ、「綺麗」な釣りを目指して欲しいということなのだと思う。釣り堀と管理釣場専門のクラブというと、キワモノ釣り師の集まりのようなイメージを持たれがちだが、極力曖昧さを排除して競技性を高めようとした佐藤徳通会長のこだわりが窺える。ただし、完全に曖昧さを排除することは難しい。「トップにかかってから～」は、本当は「落ち込み取り禁止」と言いたいところだが、どこまでが落ち込みでどこからがナジマセになるのかが曖昧なための苦肉の表現だ。完全にぶら下がってからのアタリだけを取っていては釣果は伸びないし、会員全員のウキから完全にぶら下がって静止した状態を読み取るのは不可能だ。足の長さを規定することで、ウキが立ち始める角度をある程度揃えられるし、大きなウキは上でつかまらずに通過しやすい。

現在の管理釣り場ほど大型指向が強くなく、まだまだへらの口数が多かった時代とはいえ、真冬にこの規定は拷問だった。会員の先輩方の多くは短竿セットを諦め、沖打ちでコンディションのいいへらを狙うか、底釣りを選択していたように記憶している。当時まだ底釣りに苦手意識を持っていた僕は、「普通の」セッティングなら問題なく成立する短竿セットを諦める事が出来なかった。沖打ちは日並みやポイントに左右されるため、博打は打ちたくない。しかし…ルールはルールである。「釣れないから」「隣の一般客に笑われるから」といった理由で規定を破るわけにはいかない。そこで様々な工夫が生まれた。まずウキ。長さは細かく決められていても、実際のオモリ負荷とボディ径に関しては規定がなかったため、「本多作」作者の本多俊行君にお願いし、僕らはウドンウキのような細身のスペシャルを作った。先輩方の白い目が気になったが、ウキのバランスを学ぶ上でいい経験になったと思う。次にハリス。40㎝という限られた長さの中で激シブのへらに立ち向かうために、超短い上バリでなるべく大きな段差を確保した。粒子の拡散範囲を最小限に抑えるためにシメ切ったバラケを組み合わせ、なるべく有効段差が大きくなるように努めた。今思えばセット釣りのメカニズムの理解に大きく役立った規定であったし、ハリスワークを中心とした僕のセッティング偏重の原点であった。さっきの話と矛盾するようだが、レギュレーションに縛られると見えてくるものは、確かに多い。

今年復活した「ダイワへらマスターズ」。椎の木湖で行われる東日本予選では、身の部分で6㎝以上で、かつ全長20㎝以上というウキの規定がある。最近の傾向から見れば、6㎝はかな

管理釣り場 将監（しょうげん）

〒270-1523 印旛郡栄町脇川96

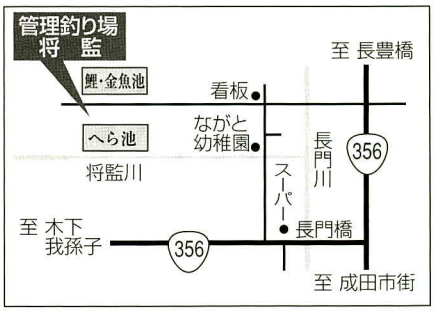
☎0476・95・0409

■営業時間　4～9月　日の出～17時
　　10～3月　日の出～15時

■料金　平日——1,500円　半日（11時～）—1,000円
　　土・日・祭日—2,000円　半日——1,500円
　　女性・子供——1,000円

■規定　竿8尺以上

■鯉、金魚釣り開設！
　営業時間　9～16時（平日、日曜共通）
　2時間1,000円（貸し竿、エサ一式込み）



り大きいと感じる人が多いのではないだろうか。いまやすっかり小ウキに慣れた僕にとっても、違和感は拭えない。今回の幸手園での取材では、ダイワの規定に合う手持ちのウキで何とかなったが、10月の椎の木湖では果たしてどうか?…特別仕様が要りそうだ。製作にあたっては、単純にボディを細くするとオモリ負荷は減らせるが、立ちが悪くなり、動きもメリハリのないものになりやすい。出来れば通常径もしくはやや細目の素材を用意し、肩は張らせて残し、その直下からフルテーパーで絞るのがいい。今度の規定では、足の長さに制限がないのがミソだ。全長を足で稼げるため、トップを短めに設定出来、これも立ちを助けることになる。本当は予選当日までに自分でウキを作りたいと思ったが、佐藤 誠君にお願いすることにした。彼も多忙なので、「まこと ダイワスペシャル」は、予選当日の朝に引き渡し予定とのこと。僕自身、次の釣行はダイワの予選ということになると思うので、ぶっつけ本番は止むナシである。「ま、そんなのも面白いジャン」とポジティブに捉えていかないと何も進まない。

ペレ宙。

10月号のDeep〜を読んだ僕は、久々に感動していた。ほとんどやらないペレ宙だが、過去数度の挑戦では、岡田君と全く同じパターンでハマっていた。読みながら僕は、釣れない状況・分からない点の整理に「あるある!」自分を重ねていた。そしてあくまでも「大型を釣る釣り」という岡田君の結論に勇気をもらい、なんだか僕も次は釣れそうな気がしたのである。釣れない様を平気でさらけ出せる岡田君と、他人の釣れない状況をあそこまで引き出して分析・整理出来る里ちん。最高のタッグが生み出した傑作と言えよう。全ての読者へは無理としても、僕もこういう感動を与えることが出来ているのだろうか。

午後、ペレ宙を打つ。ペレット濃い目の強いエサでは、自作のデブトップは沈没寸前だった。時間が経つにつれアタリは出てきたが、とても食い切れないのか全く乗らない。それでも僕は構わず打ち切り、雷であわてて竿をしまうまでの約1時間で釣れたのは数枚だった。結果としては「大ボケ」である。数を釣るだけのステージがなかったのか、もしくは短時間で築き上げることが出来なかったのかはわからないが、釣れた数枚のへら全てがモンスター級であったことに、プロセスとしては「納得」であった。

ミラクル。

天笠氏との対談から1年以上がすでに経過した。あの日吹っ切った筈の休日へのこだわりは、今なお消えていない。そのかわり月イチでどこまで出来るのか?というテーマに、本気で挑む覚悟が出来つつある。先月号にも書いたように、今までの僕は「もっと練習してから」という気持ちを捨て切れないでいたのだが、これからはどんどん大会に出ていきたい(過去にも何度も同じことを書いているが…)。

月イチならコケてもいい。というより、コケて当然なのだ。そこをいかにして奇跡を起すのか? どんな工夫が必要になるのか? それが僕のテーマであると、完全に消化できるまでに40回もかかってしまった。たくさん練習して結果を出すことを、僕は求められてはいない。経験と勘に頼ることなく、知識だけで「自然と」・「へらと」対峙する。本来の魚釣りから大きく逸脱する姿勢ではあるが、出来るだけその思考プロセスを文字にすること、それが僕の使命なのだろう。その時々で、自分の中の理論を補完、完結させていく。妄想でも間違いでもいい。一を聞いて十を「無理矢理」知るしかない。

「ハナにつく」と嫌悪感ムキ出しの感想がある一方で、僕みたいな人間にマニュアル整備を期待してくれているメールは多い。「200枚釣れる人にこれ以上の勉強は不要。どんどん試合に出て下さい」というメールを下さったNさん、勉強は一生続きますが、頑張りたいと思います。

10月号VOICEに投稿して下さった茨城県美野里町の上野明寛さん、今後も期待を裏切らぬよう頑張りたいと思います。

「原稿に穴をあける」と言えば、以前ピンチヒッターで登場願ったカットビ君こと西澤良純氏が「へら専科」でライターとしてデビューすることになり、頼みづらくなってしまった。もちろん時間的な問題のことであって、専科編集部からの圧力などは「当然」ない。将来的には、同じ場所で取材をして、それぞれの見方で同じ記事を書くなんてのも面白いか。僕ときが軽はずみに触れていい領域ではないのは十分承知。でも、里ちんならきっとこう言うのだ。

「面白いっすね〜ソレ。どんどんやっちゃって下さいヨ!」 ■

いかがでしたでしょうか? 分かる読者がどのくらいいるのか見当もつかない、しょーもない駄洒落のタイトルに期待?したら、前フリなしの、実は「脳内セット」を凌ぐこってり濃厚系の「えな理論」が大展開。ホント、この人の頭の中はどうなってるんだか…。まぁでも、来月のへらマスターズ予選は何かをやってくれそうな気にさせてくれるからスゴい。

ところで、せっかく佐藤氏に撮っていただいた写真ですが、字数が多過ぎて掲載不可。ゴメンナサイ、全部アニキのせいです!

by里ちん

釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名〜 75名	60,000円
76名〜100名	65,000円
101名〜125名	70,000円
126名〜150名	75,000円
151名〜175名	80,000円
176名〜200名	85,000円

・仕上がりは黒一色です
・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

1.ぐりへら鮒会
2.ぐりへら鮒会
3.ぐりへら鮒会

・番付をインターネットで公開できます(無料)

お問い合わせご注文はお早めに!

取扱店:柴 舟 03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに

転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円〜
2回目以降同じものをご注文の場合は3,500円〜

・8書体、8色を御用意しています
・角印も作れます

取扱店:
柴舟(東京都江戸川区)
03-3613-2727
佐伯釣具店(神奈川県川崎市)
044-911-3722
SANSUI川づり館(東京都渋谷区)
03-3499-5025
フィッシング中原(神奈川県川崎市)
044-711-8266
鮒仙人(神奈川県川崎市)
044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店
または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com

へら鮒釣りの楽しさを追究し続ける…

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna

No.479 Nov.2005

11

平成17年11月1日発行（毎月1日発行）第40巻 第11号 昭和41年5月4日第三種郵便物認可

秋のオカッパリ大作戦。

トマちゃん・佐原向地に突撃！

NORIES HARLEM
40th Anniversary Year
40th Anniversary Year
40
SOVEFISHE
Interus

へら鮒 2005 11
昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第40巻第11号（毎月1回1日発行）
平成17年11月1日発行

秋のオカッパリ大作戦。

定価 一000円 本体九五二円

(株)へら鮒社

MARUKYU

ハイエンド へらダウン
HIGH END HERA DOWN

厳寒期を、楽しもう。
Enjoy fishing in the Extreme cold!

グースダウン80%・フィルパワー660
こだわりの高品質が、ゆとりの保温力をもたらします。

なによりも暖かさにこだわった「ハイエンドへらダウンHG-01」。へら用ダウンとして理想的な、ダウン混率80%以上。
良質なグースダウンを、たっぷりと内蔵しています。ダウンの品質を示すフィルパワー※数値は、実に660。
一般的に、フィルパワー550以上が高品質なダウンといわれますが、それを大きく上回った品質です。
もちろん、生地や縫製、機能やデザインの面でも、ベストを追求。
極寒の真冬でも、快適にへら鮒釣りが楽しめるウェアに仕上げました。
※フィルパワーとは、ダウンを収縮させたときに、再び空気を含んでふくらむ復元力がどれくらいあるかを表す数値。この数値が高いほど、断熱効果に優れ、暖かいと判断できます。

NEW COLOR
オレンジグレイ

表地は水を弾く撥水加工生地
表地には、撥水加工処理を施したリップストップナイロン※地を100%使用。少々の雨や水飛沫程度なら、水玉状にして弾きます。
※リップストップとは、裂け止め・破れ止めの意味です。

快適さを高めるハイグレーター
肌触りがよく、保温性があり、静電気防止や抗菌消臭に有効な機能素材。襟・サロペット・ハンドウォーマーの内側に採用しました。

冷たい風の侵入を防ぐインナーカフス
ジャケットの袖口と、パンツの裾口に設けられた、冷たい風の侵入を防ぐための工夫。手首・足首を締め付け過ぎないように配慮しました。

ガンメタブラック　シルバーグレイ　ロイヤルブルー

ハイエンドへらダウンHG-01
製品番号:シルバーグレイ ／Lサイズ3120 LLサイズ3121 3Lサイズ3122
ロイヤルブルー ／Lサイズ3123 LLサイズ3124 3Lサイズ3125
ガンメタブラック／Lサイズ3126 LLサイズ3127 3Lサイズ3128
オレンジグレイ ／Lサイズ3189 LLサイズ3190 3Lサイズ3191
※オレンジグレイの配色は、ジャケットがオレンジ、パンツがシルバーグレイです。他のカラーは、ジャケット、パンツ同一色のみでの販売となります。

	身長	胸囲	ウエスト	股下
Lサイズ	170〜180cm	90〜98cm	78〜88cm	75cm
LLサイズ	175〜185cm	96〜104cm	86〜96cm	77cm
3Lサイズ	175〜185cm	102〜110cm	94〜104cm	77cm

メーカー希望本体価格:Lサイズ 49,000円/LLサイズ 49,000円/3Lサイズ 52,000円

2006「横浜」開催
2/10fri 11sat 12sun at「パシフィコ横浜」
国際フィッシングショー2006

マルキユー株式会社
〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4
お問い合わせ 本社・桶川工場:048-728-0909 大阪支店:072-824-0909 四国営業所:0877-44-0909 九州営業所:0942-82-0909
ホームページアドレス http://www.marukyu.com/
釣り場でエサに困ったら iモード・ホームページ http://www.marukyu.com/i

雑誌 07907-11
4910079071152
00952